

# 高级日语

主编 吴侃 村木新次郎

# 3

W  
外教社

上海外语教育出版社



主编 吴侃 村木新次郎

# 高级日语

3 江苏工业学院图书馆  
藏书章



外教社

上海外语教育出版社

**图书在版编目(CIP)数据**

高级日语. 3/吴侃,(日)村木新次郎主编.

—上海:上海外语教育出版社,2004

ISBN 7—81080—959—8

I. 高… II. ①吴…②村… III. 日语—高等学校  
—教材 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2003) 第 066582 号

**主编** 吴侃 村木新次郎

**编者**(以姓氏笔画为序)

|    |                |    |                  |
|----|----------------|----|------------------|
| 中方 | 马安东(浙江大学日语系)   | 日方 | 三木麻由美(日本同志社女子大学) |
|    | 王建民(上海水产大学日语系) |    | 田口圣子(日本同志社女子大学)  |
|    | 叶琳(南京大学日语系)    |    | 村木新次郎(日本同志社女子大学) |
|    | 吴侃(同济大学日语系)    |    | 森下训子(日本同志社女子大学)  |
|    | 谈建浩(同济大学日语系)   |    |                  |
|    | 徐曙(同济大学日语系)    |    |                  |
|    | 魏铀原(同济大学日语系)   |    |                  |

**出版发行: 上海外语教育出版社**

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

**电 话:** 021-65425300 (总机), 35051812 (发行部)

**电子邮箱:** bookinfo@slep.com.cn

**网 址:** <http://www.slep.com.cn> <http://www.slep.com>

**责任编辑:** 应 允

---

**印 刷:** 上海长阳印刷厂  
**经 销:** 新华书店上海发行所  
**开 本:** 787×960 1/16 印张 17.75 字数 368 千字  
**版 次:** 2004 年 7 月第 1 版 2004 年 7 月第 1 次印刷  
**印 数:** 5 000 册

---

**书 号:** ISBN 7-81080-959-8 / H · 326  
**定 价:** 19.00 元

本版图书如有印装质量问题,可向本社调换

## 前 言

近年来,全球化的浪潮以前所未有的速度不断推进。同时,我国在历经 20 余年的改革开放,并取得了巨大成就之后,又成功地加入了世贸组织,这无疑是我国进一步融入世界体系的一大跨越。在这一形势下,外语的需求也进入了一个新的时期,全国范围内出现了新一轮外语热。日语也和其他语种一样,迎来了一个新的热潮。

但是,尽管需求极大,适用的日语教材,尤其是高级教材却不多,不少教材存在内容陈旧、讲解不尽准确等问题。同时,有些教材只顾及了语言知识的传授以及语言技能的训练,而忽略了对日本社会、文化的介绍和学习,造成了学习日语的学生不懂日本社会的现象。本教材正是针对这一情况而编写的,除传授语言知识外,还侧重对日本社会、文化的介绍和理解,力争在这一方面有所突破。

本教材是以大学本科日语专业 3、4 年级学生为对象的精读教材。整套教材共 4 册,1—3 册各 12 课,第 4 册 8 课。每课基本由课文、单词、文化·社会、表达、辨析、练习等部分组成。其中“表达(表現)”部分不拘泥于语法体系,涵盖了中国人学日语所需要的各方面内容,并特设专栏,讲解重点。“辨析(使い分け)”栏目主要讲解日语中容易混淆的一些语法现象、单词、句型、读法等。练习部分侧重“高级”阶段所需要的语言训练和文章理解。

本教材由中日双方共同编写。中日双方共同负责搜集课文素材,撰写“辨析”栏目;日方负责撰写“文化·社会”专栏、“表达”专栏,以及最终审稿;中方负责编写生词表、“表达”部分和练习部分。

在迎来新世纪的时刻,在总结以往中国的日语教学经验和教训的基础上,我们推出本教材,愿为使中国的日语教学更上一个新台阶而贡献微力。不足之处,望广大同仁予以批评指正。

本教材在编写过程中得到了日本国际交流基金的资助,在此表示由衷的感谢。

本教材所选用的文章的原作者欣然允诺免费使用其作品,借此机会,对他们表示由衷的感谢。

编 者

2004.3

## 推薦の辞

近代における中国の日本語学習・教育は、清末に始り、すでに百年の歴史があります。ここ数十年では、日中国交回復と中国の改革・開放政策の実行で、二回の大きなブームが起こり、これから中国のWTO加盟で日中交流がいちだんと盛んになり、更に大きなブームが続くものと思われます。

幸いにも、私は1980年8月から5年間、日本と中国の共同事業としての日本語教師培训班(通称大平学校)で、さらにその後の半年間、日本学研究センターで、中国の若い先生たちと、日本語を研究したり日本語の教え方を考えたり、また、中国で使う日本語教材「標準日本語」の編集に加わることもできましたが、この教材は現在中国で広く使用されています。私は、現在の中国の日本語教育のレベルは非常に高いものであると思います。

現在、中国における日本語の教材の中で、初級、中級の教材は優れたものがかなりあると思いますが、ハイレベルの上級用の教材はあるでしょうか。私が知っている上級用の教材は、日本の小説や随筆などから無難な部分を抜き出して並べただけのもので、それでは、現在の日本文化や社会事情を十分に理解する役にはあまり立たず、日本語のたしかな力をつける工夫もあまりなされているとは言えないようなものばかりです。現在でもその事状はあまりかわっていないのではないのでしょうか。

此の度、呉侃・村木新次郎両氏の編集による上級日本語を拝見して、私がずっと気にしてきた問題がほとんど解決されたことにほっとしています。日本の現在のいろいろな姿を描き出して、鋭い問題提起をしている「課文」、その課文を読みこなすための親切なガイド「新出単語」、日本の抱える問題点を明確に示す「文化・社会」、日本語の理解と運用の力を確実につけてくれる「表現」と「使い分け」など、実に素晴らしいもので

あり、他の教科書に見られないものです。また、最後には相当に難しい、高いレベルの「練習」があることも、この教材を使えば高いレベルの学生が養成される保証になっているかと思います。

以上、この教材を、日本語を勉強する皆さん、日本語の先生方に心から推薦致します。

北京語言文化大学名誉教授

西安外国語学院名誉教授

京都外国語大学教授

佐治圭三

## 凡 例

1. 生词按课文中出现的顺序及词形列出。其中汉字的注音放在括号中,课文中未写汉字、或只写出该词的一部分汉字的词,在括号中写出带汉字的全部词。
2. 每个单词都标注重音和词性。仅是名词或词组的省略词性。词性略语见略语表。
3. 单词用双语释义,但有些非常简单,用中文即可一目了然的词,省略日语释义。
4. 表达按照课文中出现的顺序列出。表达条目用假名书写,有汉字的将汉字列在后面。其中,通常使用该汉字的,用实心黑方括号(【】);虽有汉字,但通常不写该汉字的用空心括号(《》)标明。

### 5. 略语表

|       |          |
|-------|----------|
| 〈名〉   | 名词       |
| 〈他五〉  | 五段他动词    |
| 〈他一〉  | 一段他动词    |
| 〈自五〉  | 五段自动词    |
| 〈自一〉  | 一段自动词    |
| 〈他サ〉  | サ变他动词    |
| 〈自サ〉  | サ变自动词    |
| 〈自力〉  | 力变自动词    |
| 〈形〉   | 形容词      |
| 〈形動〉  | だ型形容动词   |
| 〈タルト〉 | タルト型形容动词 |
| 〈副〉   | 副词       |
| 〈接〉   | 接续词      |
| 〈感〉   | 感叹词      |
| 〈接頭〉  | 接头词,前缀   |
| 〈接尾〉  | 接尾词,后缀   |

\* 「使い分け」中表示“不能用”

## 目 次

### 第一課 坊っちゃん ..... 1

新出単語

表現

1. 荒らす 2. ぎゅうぎゅう 3. ひいき 4. 冷やかす 5. 由緒 6. のそ  
のそ 7. 得 8. 澄ます 9. お～あそばす 10. ～も何ともない 11. 欲  
12. 苦 13. 口 14. ～がよい 15. なり 16. ～にしては 17. ～ときは  
は・～ときたら 18. ～が早いか 19. ～さえ～ば 20. ～ことは～が

留意語句

練習

### 第二課 引き際 ..... 22

新出単語

表現

1. きわ・ぎわ(際) 2. 尽きる 3. 枯れる 4. ～にしても 5. ～きて  
おいて・～さておき 6. すら 7. かわす 8. ～めく 9. 当座 10. ～  
どころではない 11. とも 12. ～なしには

使い分け きけふ・わめく・どなる

しおれる・しなびる・なえる・枯れる・しぼむ

威張る・おごる・付け上がる・高ぶる

留意語句

練習

### 第三課 思いは深く ..... 41

新出単語

表現

婉曲表現㊦ほかし

1. はかない 2. ～にしろ～にしろ 3. きりきり 4. 抜く 5. 明かす

6. さながら 7. はきはき 8. せいぜい 9. だらしない 10. たる  
11. めりはり 12. 伺う 13. びしっと 14. ぐにゃぐにゃ 15. ～では  
ないが

使い分け とくに・とりわけ・わけでも  
かすか・ほのか

留意語句

練習

#### 第四課 なんでも見てやろう ..... 60

新出単語

表現

1. ～にあたって・～にあたり 2. から(に)は 3. かねがね 4. ぽっく  
り 5. なら 6. くれぐれも 7. むしゃむしゃ 8. 一斉に 9. 言わずと  
知れた 10. 化ける 11. ならでは 12. あたかも 13. ～かのように  
14. 営々 15. ひょっとしたら

使い分け めいめい・それぞれ・てんでに  
案外・意外・心外

留意語句

練習

#### 第五課 伊豆の踊子 ..... 78

新出単語

表現

1. ときめかす・ときめく 2. 調和 3. 流す 4. かちかち 5. ところ  
6. 染まる 7. ～ている場合ではない 8. 次第 9. もう～ば 10. ちょ  
こちょこ 11. よろよろ 12. ばたばた 13. ～しのぎ 14. 悩ましい

留意語句

練習

#### 第六課 異文化の根っこ ..... 102

新出単語

文化・社会 根回し

表現

1. 与る 2. とろとろ 3. ～たら最後 4. かかわる 5. 生きる 6. びっ

しり 7. 恵む 8. まとめる 9. じっと 10. なあなあ 11. 振(る)舞う  
 使い分け 依存・依拠  
 たちまち・ただちに  
 食う・食べる

留意語句  
 練習

## 第七課 日本の耳 ..... 119

新出単語

表現

1. うかがう 2. ～には～が 3. ～を前にする 4. 由 5. 域 6. しっく  
 り 7. 転々 8. さだめし 9. 求める 10. 刻む 11. あえて 12. ひた  
 すら 13. 巡る 14. ～また～と 15. 間 16. 狙う 17. 頼る

使い分け さぞ・さだめし  
 ひたすら・いちず・ひたむき

留意語句  
 練習

## 第八課 携帯上司 ..... 148

新出単語

文化・社会 親指族

表現

若者言葉

1. ってば 2. ～であれ 3. とて 4. べし 5. 丸 6. ～てかなわない  
 7. からして 8. ～ずにはおかない 9. で 10. 整える・調える  
 11. ～からすれば

使い分け 見える・見掛ける  
 不潔・不浄

留意語句  
 練習

## 第九課 解かれた象 ..... 165

新出単語

表現

## 婉曲表現㊤逆説表現

1. 何だか 2. 働く 3. あるまじき 4. らしい 5. ことによると  
 6. 付き 7. 窮屈 8. 飲み込む 9. ～には～過ぎる 10. あいにく  
 11. いっそ 12. 始末 13. なる 14. 恐れ 15. がち 16. いう

使い分け 縛る・くくる

さっぱり・まるきり・一向に

過程・いきさつ・顛末・始末・一部始終

留意語句

練習

## 第十課 演歌と日本文化 ..... 186

新出単語

文化・社会 日本の演歌

表現

1. 偲ぶ 2. たどる 3. ならずとも 4. たかが 5. どだい 6. きらき  
 ら 7. むき出し 8. どっぷり 9. づく 10. さばさば 11. 付き物  
 12. 末練 13. じっくり 14. 傾ける

使い分け 偲ぶ・慕う

あらわ・あからさま・むき出し

発表・公表・披露

留意語句

練習

## 第十一課 ディア・フレンド ..... 213

新出単語

表現

1. くる 2. 貸す 3. に 4. ちらちら 5. ～に弱い 6. ～に強い  
 7. ごちゃごちゃ 8. にらむ 9. 余計 10. 機嫌 11. 押す 12. ろく  
 13. 苦情 14. ～まぎれ 15. 情けない

留意語句

練習

## 第十二課 自立と挫折の青春像 ..... 243

新出単語

## 表現

1. 踏まえる 2. 仕組み・仕組む 3. 招く 4. ～より仕方がない
5. まくる 6. ぽっかり 7. 生 8. 被る 9. ひそか 10. ぬうぼう
11. いかつい 12. まとも 13. 荒廃 14. むらむら 15. 志向
16. 利口

使い分け 執着・執心

利口・聡明

留意語句

練習

## 第一課 坊っちゃん

なつめ そうせき  
夏目 漱石

親譲りのむてっぽうで子供のときから損ばかりしている。小学校にいる時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと聞く人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらばっても、そこから飛び降りることはできない。弱虫や一い。とはやしたからである。小使におぶさって帰ってきた時、おやじが大きな目をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかといったから、この次ぎは抜かさず飛んでみせますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフをもらってきれいな刃を日にかざして、友だちに見せていたら、一人が光ることは光るが切れそうもないといった。切れぬことがあるか、何でも切ってみせるとうけ合った。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、なんだ指ぐらいこのとおりだと右の手の親指の甲をはすに切りこんだ。幸いナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、いまだに親指は手についている。しかしきずあとは死ぬまで消えぬ。

.....

このほかいたずらはだいぶやった。大工の兼公<sup>かねこう</sup>とさかな屋の角<sup>かく</sup>をつれて、茂作<sup>もきく</sup>のにんじん畠をあらしたことがある。にんじんの芽が出そろわぬところへわらが一面に敷いてあったから、その上で三人が半日すもうをとりつづけにとったら、にんじんがみんな踏みつぶされてしまった。古川の持っているたんぼの井戸を埋めてしりを持ちこまれたこともある。太い孟宗のふしを抜いて、深く埋めた中から水がわき出て、そこいらの稲に水がかかるしかけであった。その時分はどんなしかけか知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へさしこんで、水の出なくなったのを見届けて、うちへ帰って飯を食っていたら、古川がまっかになってどなりこんできた。たしか罰金を出してすんだようである。

おやじはちっともおれをかわいがってくれなかった。母は兄ばかりひいきにしていた。この兄はやに色が白くって、芝居のまねをして女形になるのが好きだった。おれ

を見るたびにこいつはどうせろくなものにはならないと、おやじがいった。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母がいった。なるほどろくなものにはならない。ごらんのとおりの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役にいかないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへつついのかどであばら骨をうって大いに痛かった。母がたいそうおこって、おまえのようなものの顔は見たくないからというから、親類へ泊まりに行っていた。するととうとう死んだという知らせがきた。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病ならもう少しおとなしくすればよかったと思って帰ってきた。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おっかさんが早く死んだんだといった。くやしかったから、兄の横つらををはってたいへんしかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で人の顔さえ見れば貴様はだめだだめだと口ぐせのようにいっていた。何がだめなんだか今だにわからない。妙なおやじがあったもんだ。兄は実業家になるとかいつてしきりに英語を勉強していた。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一遍ぐらいの割りでけんかをしていた。あるとき将棋をさしたらひきょうな待駒をして、人が困るとうれしそうに冷やかした。あんまり腹がたったから、手にあった飛車を眉間へたたきつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじがおれを勘当すると言い出した。

そのときはもうしかたがないと観念して先方のいうとおり勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清という下女が、泣きながらおやじにあやまって、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずおやじをこわいとは思わなかった。かえってこの清という下女に気の毒であった。この下女はもと由緒あるものだったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だからばあさんである。このばあさんがどういう因縁か、おれを非常にかわいがってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中もてあまして——町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする——このおれをむやみに珍重してくれた。おれはとうてい人に好かれる性でないとおきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのはなんとも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人のいないときに「あなたはまっすぐでよいご気性だ」とほめることが時々あった。しかしおれには清のいう意味がわからなかった。いい気性なら、清以外のものも、もう少しよくしてくれるだろうと思った。清がこんなことをいうたびにおれはお世辞はきらいだと答えるのが常であ

った。するとばあさんはそれだからいいご気性ですといつては、うれしそうにおれの顔をながめている。自分の力でおれを製造して誇っているように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれをかわいがった。時々子供心になぜあんなにかわいがるのかと不思議に思った。つまらない、よせばいいのにと思った。気の毒だと思った。それでも清はかわいがる。折々は自分のこづかいできんつばや紅梅焼きを買ってくれる。寒い夜などはひそかにそば粉を仕入れておいて、いつのまにか寝ている枕元へそば湯を持ってきてくれる。時には鍋焼きうどんさえ買ってくれた。ただ食べ物ばかりではない。くつたびももらった。鉛筆ももらった。帳面ももらった。これはずっとあとのことであるが金を三円ばかり貸してくれたことがある。なにも貸せといったわけではない。向こうでへやへもってきておこづかいがなくてお困りでしょう、お使いなさいといってくれたんだ。おれはむろんいらないといったが、ぜひ使えというから、借りておいた。実はたいへんうれしかった。その三円をがま口へ入れて、ふところへ入れたなり便所へ行ったら、すぽりと後架の中へ落としてしまった。しかたがないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清はさっそく竹の棒を捜してきて、取ってあげますといった。しばらくすると井戸端でざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へがま口のひもを引っかけたのを水で洗っていた。それから口をあけて壹円札を改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火ばちでかわかして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいてみてくさいやといったら、それじゃお出しなさい、取り換えてきてあげますからと、どこでどうごまかしたか札の代わりに銀貨を三円持ってきた。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよといったぎり、返さない。今となつては十倍にしてやりたくても返せない。

清が物をくれるときには必ずおやじも兄もいないときに限る。おれは何がきらいだといって人に隠れて自分だけ得をするほどきらいなことはない。兄とはむろん仲がよいけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆をもらいたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、にいさんにはやらないのかと清に聞くことがある。すると清は澄ましたものでお兄様はお父様が買ってあげなからかまいませんという。これは不公平である。おやじはがんこだけれども、そんなえこひいきはせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛におぼれていたにちがいない。元は身分のあるものでも教育のないばあさんだからしかたがない。単にこればかりではない。ひいき目は恐ろしいものだ。清はおれをもって将来立身出世してりっぱなものになると思いこんでいた。そのくせ勉強する兄は色ばかり白くって、とても役にはたたないと一人できめてしまった。こんなばあさんにあつてはかなわない。自分の好きなもの

は必ずえらい人物になって、きれいな人はきっと落ちぶれるものだと思っている。おれはそのときから別段何になるというりょうけんもなかった。しかし清がなるなるといふものだから、やっぱり何かになれるんだろうと思っていた。今から考えるとばかばかしい。あるときなどは清にどんなものになるだろうと聞いてみたことがある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車へ乗って、りっぱな玄関のある家をこしらえるに相違ないといった。

それから清はおれがうちでも持って独立したら、いっしょになる気でいた。どうか置いてくださいと何遍も繰り返して頼んだ。おれもなんだかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、麴町こうじまちですか麻布あさふですか、お庭へぶらんこをこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどとかってな計画をひとりで並べていた。そのときは家なんかほしくもななともなかった。西洋館も日本建てでも全く不要であったから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲が少なくて、心がきれいだといってまたほめた。清はなんといってもほめてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮らしていた。おやじにはしかられる。兄とはけんかをする。清には菓子をもらう、時々ほめられる。別に望みもない、これでたくさんだと思っていた。ほかの小供も一概にこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけてあなたはおかawaiiそう、ふしあわせだとむやみにいうものだから、それじゃかわいそうでふしあわせなんだろうと思った。そのほかに苦になることは少しもなかった。ただおやじがこづかいをくれないのには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中でなくなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄はなんとか会社の九州の支店に口があってゆかなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家売って財産を片づけて任地へ出立するといいだした。おれはどうでもするがよからうと返事をした。

.....

九州へたつ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使うがいい、その代わりあとはかまわないといった。兄にしては感心なやり方だ。なんの六百円ぐらいもらわんでも困りはせんと思ったが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、札をいってもらっておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれといったから、異議なく引き受けた。二日たって新橋の停車場で別れたぎり兄にはその後一遍もあわない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商売をしたってめんどうくさくっ